

## 「敷地境界線と塀の関係の再考」

敷地境界線と塀。それはあまりにも単純な関係性で敷地境界を浮き彫りにする。

敷地境界線とあたかもそこにあったかのように建てられている塀のことを考えてみることにする。それは、もうすでに敷地境界線によって建築の佇まいが想像できてしまう。

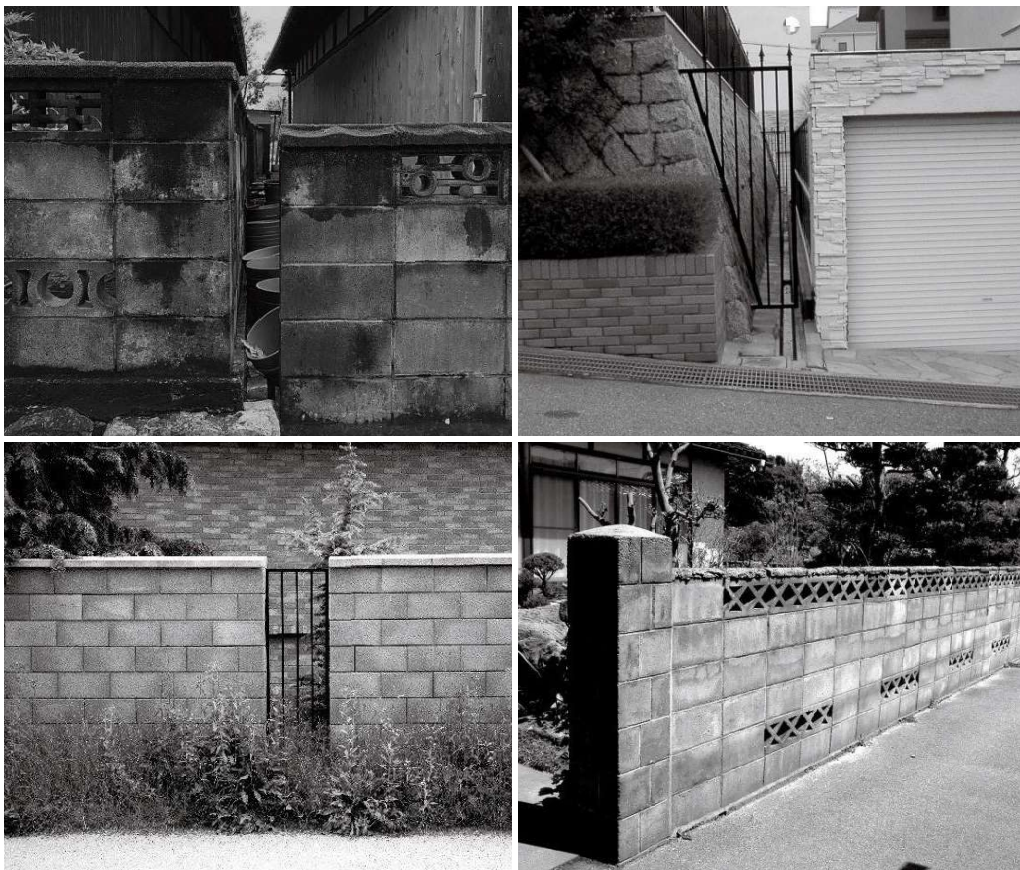
そこで、敷地境界線と塀のことを改めて再定義することで、全国で開発が進んでいる新興住宅街のあり方に一石を投じることができるのではないかと考えた。

それにより、住宅街の街並みや建築の建ち方にも影響を与えることができるのではないだろうか。

敷地境界線と塀の関係。それは、特に住宅地では大抵敷地境界線に沿って塀が建てられる。

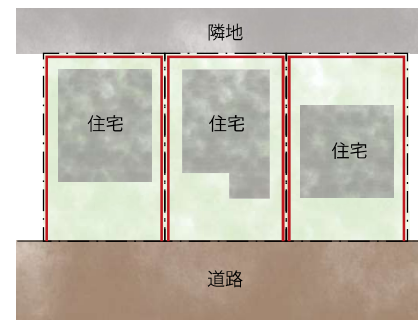
あたかも隣人との関係を拒絶するかのように平然と。そうしてできた住宅街は、どこも同じような街並みとなり、すべての住宅が一つの住宅として完結してしまった閉じた住宅となり、閑静で殺風景でつまらない街並みとなる。

再定義された敷地境界線と塀の関係は、住宅地の新たな風景やコミュニティをつくり出し、街に活力を生み出すことができるのではないだろうか。

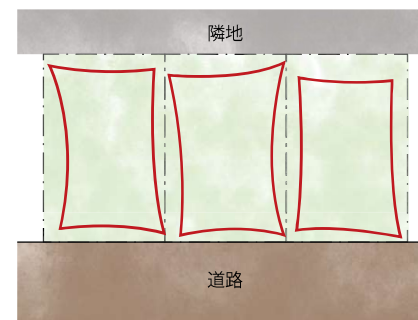


## Diagram 一塀の再考一

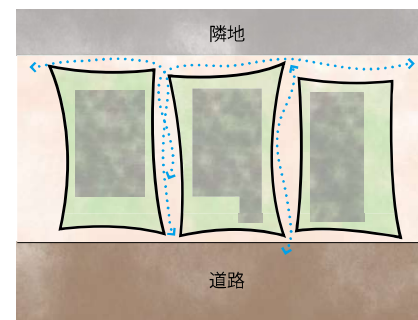
1. 敷地境界線沿いに建設される塀。周囲を拒絶する壁となっている。



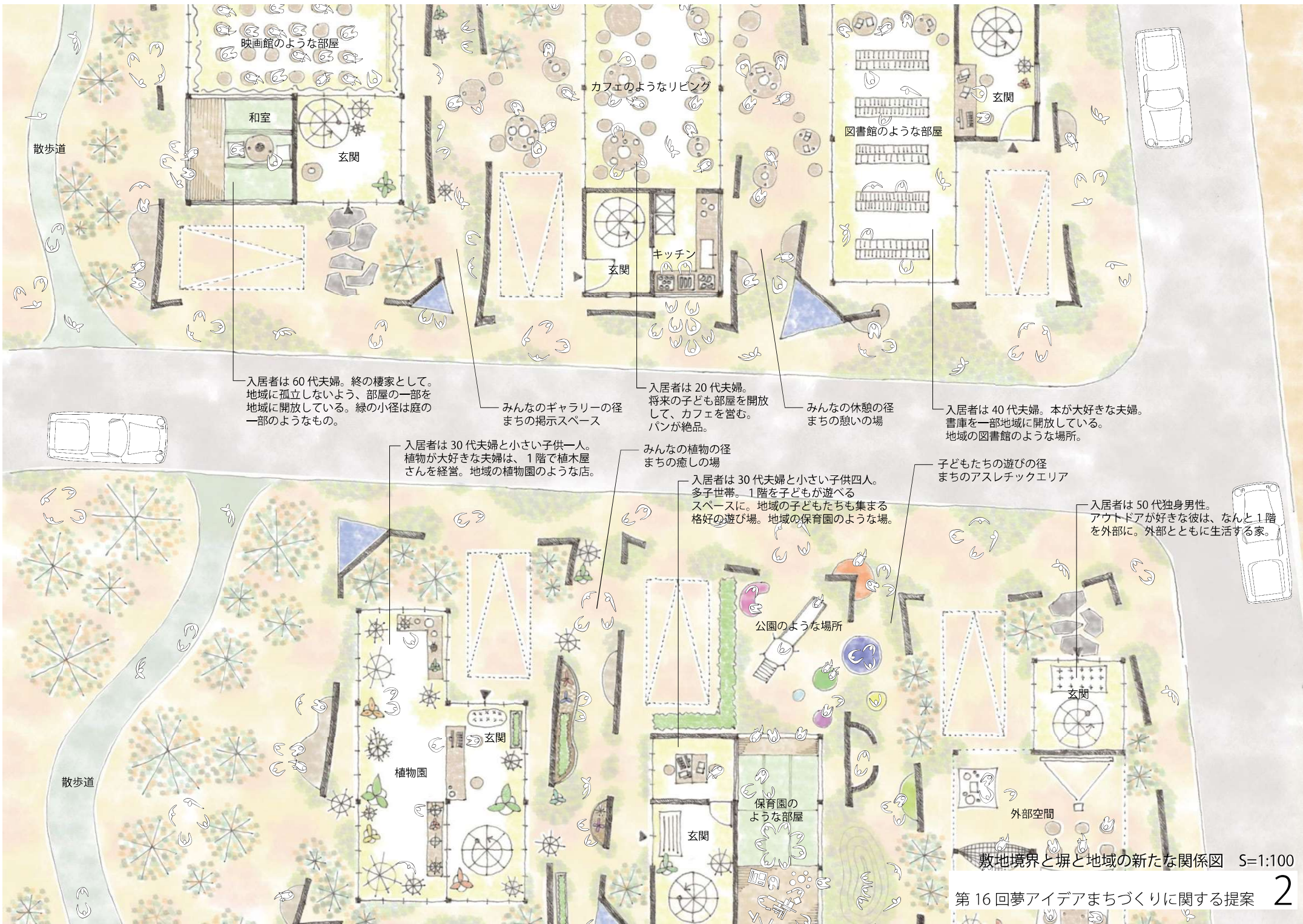
2. 塀を湾曲させる。余白（隙間）をつくる。  
自分の敷地を一部開放することで接道面が増え、コミュニティが形成される。



3. 敷地境界と塀の境目に余白ができ、そこは路地ならぬ超小径となる。  
街の余白は、地域のパブリックスペースとなり、街並みに変化が起きる。









## Concept

敷地境界線と塀の間に余白をつくり、自分の敷地の一部を地域に開放する。

余白となった部分は、路地ならぬ「超小径」となり、地域のパブリックスペースとなる。

「超小径」ができることで、自分の敷地は少し狭くなるが、その分接道面が増える。

接道面が増えれば、街との接する部分が増えるので、そこで地域のコミュニティが形成される。

コミュニティが形成されれば、それぞれの住宅は、超小径に対して開かれ、生活がそこからあふれ出されていく。

生活があふれ出されれば、「超小径」は、それぞれ特徴を持った径となり住宅街に彩りをあたえていく。これは、自分の街に対する「投資」(give & take) のようなものである。



断面図 S=1:100



超小径からはじまるコミュニティ



塀は、隔てるモノではなく、つなげるモノと化す